# 東も西も南も北も、見聞録は最終章へ

株式会社WOLVES HAND　篠栗動物医療センター　獣医師　大音　光生

タイではバンコク市内に住み、二人の息子はタイ人の子どもたちが通う幼稚園に入園した。スタッフは全てタイ人。お昼にはタイの家庭料理の様な給食が出る。住まいはマンション暮らしから、一軒家に引っ越した。庭には大きなマンゴーの木があり、いつの間にかたくさんの実が熟していた。まるで日本で柿の木から実を取るように、長い棒でマンゴーの実を取って腹いっぱい食べた。タイ在任の２年８ヶ月の間に、タイ国内のあちこちへ出掛けて行った。北西部のミャンマー国境近くの首長族の村を訪れたり、東部の町に象祭りを見に行ったり、南部のマレーシア国境近くを車で走ったり。業務視察ではタイ北部チェンマイの家畜人工授精センターを視察したが、エアコンの効いた部屋に種雄牛がいたのには驚いた。息子らの通う幼稚園からお迎えしたトイプードル（男の子：シロ）と共に、1998年７月30日、JICA専門家の任期を終え、４人と１匹で思い出いっぱいのタイに別れを告げ、帰国の途に就いた。

タイ在任中からインドネシアで進行中のJICA酪農プロジェクトのことは知っていたが、自分がこのプロジェクトへ派遣されるとは、ちょっと驚きだった。昭和の初期、母方の祖父が家族と共にインドネシア第２の都市、ジャワ島のスラバヤに移住し、綿花を中心とした貿易商をやっていた。私の母はそのスラバヤで生まれた。母の生まれ故郷へ行けるかもしれない。そんな期待も持ちつつ1998年10月１日、成田空港を出発した。今回は単身で、ジャワ島第３の都市バンドンへの短期派遣（２ヶ月）だった。母が生まれた島へ行けるというだけで、ワクワクした気持ちになった。

幸運が重なる時は重なるもので、私の派遣期間中に東ジャワ州で展開されているJICA農業プロジェクトへの視察に同行することになった。そのプロジェクトの業務調整員B氏は青年海外協力隊の私の同期隊員で東ジャワ州の州都スラバヤに在住していた。B氏に聞けばスラバヤのことが色々と分かるかもしれない。私の母は既に他界していたので、母のルーツ探しは、伯母から聞いていた祖父が商売をし、家族で住んでいた通りの名前「ソンゴユダン通り」だけが唯一の手掛かりだった。B氏に話をすると「ソンゴユダン通りならうちのドライバーが知ってるよ」とのこと。これは信じられないくらい幸運なことだった。そして、僅かな業務の空き時間を利用してB氏のドライバーにお願いし、「ソンゴユダン通り」へ連れて行ってもらった。母が存命なら67歳、他界してから既に19年が経過した1998年11月、母生誕の地を訪れることができた。母の家族はここでどんな生活をしていたのだろうか。

翌年の1999年２月から３か月間、JICA専門家としてもう一度インドネシアへ派遣されることになった。今回は初めて受精卵移植分野での専門家派遣となるので、かなりの緊張感を持っての業務遂行だった。仕事の合間にインドネシア家畜受精卵センターの獣医師と一緒に地元のサファリパークへ行ってみた。そこで見た巨大な角を持つ牛の姿は、今でも鮮明に覚えている。

巨大な角を持つ牛。アメリカ原産の牛？

いよいよ東へ向かう日がやってきた。1999年７月23日の夜、家族４人＋１匹（シロ）は成田空港でRG（ヴァリグ・ブラジル航空）837便、サンパウロ行きに搭乗。太平洋に出て日付変更線を越え、南米大陸を目指した。サンパウロ空港でボリビアへ向かう飛行機に乗り換え、成田を離陸してから24時間05分、地球の裏側ボリビアのサンタクルス空港に到着。JICA肉牛プロジェクトの受精卵移植の長期専門家として着任した。サンタクルスはアマゾン川流域の低地にあり、冬は短く暑い気候が続く。雨もそれほど降らない。

私と妻は、毎晩スペイン語家庭教師の集中レッスンを受けた。当時９歳と７歳の息子たちは英語の個人レッスンを受け、英語教育を行っているアメリカ系インターナショナルスクールを目指したが、長男はアメリカ系でない英語教育の学校へ、次男は地元のスペイン語教育の学校へ入学することになった。日本語を中心に、スペイン語と英語がミックスされた家族の会話が２年間続いた。

国内旅行もあちこちへ行ったが、首都ラパスの道端で売られていた「リャマの胎児のミイラ」にはドキッとさせられた。何かの儀式で使うようだが、売られているということは買う人がいるということで、これはボリビアに来て一番のカルチャーショックだった。そしてボリビアに来て10ヶ月が経過した頃、うちの愛犬シロが姿を消した。自分で庭のフェンスの下を掘って、外へ出たところを何者かに連れ去られたようだ。ボリビアのどこかで元気に生きていることを願うしかなかった。

首都ラパス旧市街の路上で売られていたリャマの胎児のミイラ

2002年の秋、私はJICAチリ酪農プロジェクトへ受精卵移植専門家として派遣されることになった。次男（小４）は「もう一度スペイン語の学校へ行きたい」と言う。長男（小６）は「日本でやりたいことがある」と言うので、妻は「それなら私も日本に残る」と言う。その結果、「父＆次男」＝チリ組、「母＆長男」＝日本組、のふた組に分かれることになった。2002年10月５日、チリ組は再び太平洋を越える飛行機に乗った。

日本とチリの時差は12時間、季節差６ヶ月。国際電話で話すと会話が面白い。こっちが「おはよう」で、向こうは「おやすみなさい」になる。こっちが「もうすぐ夏休みでクリスマス」で、向こうは「クリスマスは寒くて冬休み」となる。

ふた組に分かれて１年３ヶ月が経過した2003年12月、妻と長男（＋妻の両親＋妻の友人２人）がチリに来てくれて、チリの国内旅行を楽しんだ。チリ南部の氷河とイースター島のモアイ像は家族揃って見に行けて、家族一生の思い出となった。

チリのトーレス・デル・パイネ国立公園。背後には氷河を抱える山脈が

南米まで来て「地球の上での」東西南北を達成した。北米やヨーロッパは、そもそもほとんどの国がJICAの支援対象国ではないし、アフリカでは畜産関係のプロジェクトの立ち上げはなかなか難しい。これで私が仕事をした６ヶ国の見聞録は最終回とさせて頂きたい。今までこのエッセイを読んで下さった皆様に感謝申し上げます。心から、「シュクラン」「シエシエ」「コップンクラップ」「テレマカシー」「グラシアス」、そして「ありがとう」。

今回で、国際協力の現場・赴任国やご家族の様子などをご紹介いただきました本エッセイが最終回となりました。大音光生氏には、６年を超える長きにわたるご執筆に心よりに感謝申し上げます。詳細な記録がなせる業と敬服しておりました。今後のご活躍をお祈りいたします。（編集部）